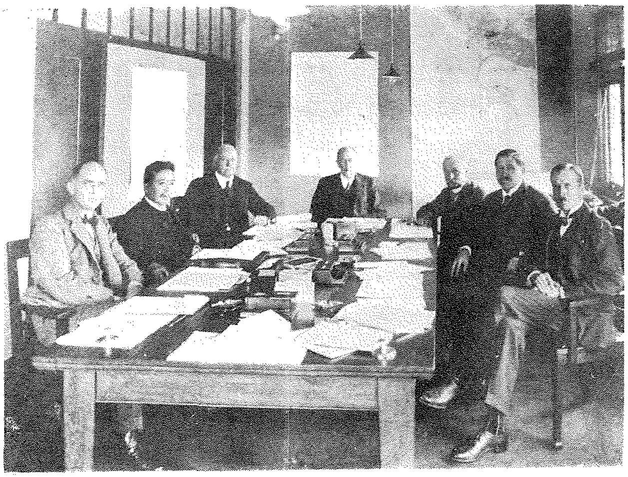


寫眞1. 上海港に於ける國際技術會議の狀況左側中央が廣井勇博士

國定教科書に編入される

廣井勇博士の事績

昭和3年10月1日、廣井勇博士の逝去されてから爰に12年を經た。其間に博士の先覺的人格を敬慕する知友や門下の名士多數に依つて、廣井勇博士紀念事業會が設立され、小樽市公園に紀念銅像の建立と、傳記の編纂と、東京帝大工學部と、北大工學部に奬學基金の寄贈と、此三事業を完成された事は今尙ほ世人の記憶に新なる處である。

我が工事畫報社は創刊以來、廣井勇博士の指導淺からぬものがあり、博士の傳記編纂に關與するに至り、而して博士の遺德を顯彰する事は、卽ち我國の工事精神を發揚する事となり、土木の眞の使命を强調する所以なりと信じ、努めて廣井博士傳の普及に盡したのである。幸にして各方面の共鳴者により、傳記は各地方の圖書館に藏せらるゝに至り、技術者以外の一般人にも閲覽さるゝに至つた。

而して廣井勇博士記念事業會は、以上三事業完遂と俱に解散となつたが、尙ほ小數の人々は每年 10月1日を廣井博士記念日として多磨靈園の博士墓所を訪ねる事、十年一日の如くに續け來つたのである。

去る者は日に疎しと云ふ言葉もあるが、廣井博士の經世の精神は烈々として月を重ね年を經るに從つて何處よりか又復活の力を發揮するであらう。恰も今年皇紀2600年を迎へて、新東亞建設と云ふ建國以來の大業に國を擧げて邁進しつゝある時、圖らずも廣井勇博士の事績が、文部省編纂の師範學校教科書に編入さるゝ事となつたのである。

文部省が何故に廣井博士の事績を國定教科書に編入するに至つたかは問ふ迄もない、博士の人物を知るものには元より當然の事であるが、然らば今迄もつと早く何故に編入されなかつたかと云へば、それは土木工學者として餘りに偉大なる博士であつた故と思はれる、燈臺下暗しの例にもれず、博士の偉大さは土木家以外の第三者に於て寧ろ大なる精神的共鳴者を得つゝあつたのである。

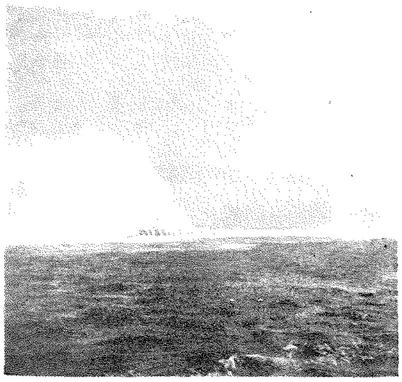
文部省は曾て、新時代に卽應する國定教科書の編纂資料を全國的に懸賞募集した、其際に『責任』と『信念』と云ふ題材を以て廣井

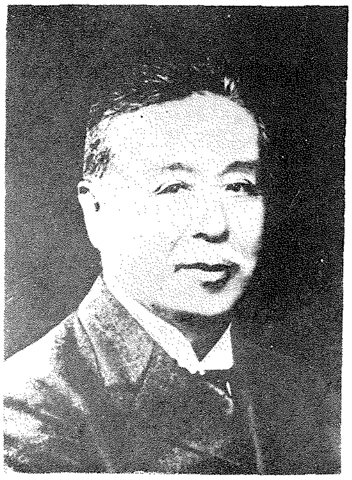
勇博士の事績を應募した人があつた、それが第3等入選となり、師範學校用の教科書に編入さるゝ事になつたのである。

然らば其應募者は誰であるか、それは土木技術者又は土木關係者でもない、函館市の獨立教會に屬する三浦政治と稱する一牧師である。三浦氏は元より直接に廣井博士を知つた人ではないが、三浦氏が尊敬する內村鑑三氏の文書により廣井博士を知り、而して廣井博士の傳記を見て其事績を知り、之を文部省に應募したものである。三浦氏が如何なる應募の形式を以て投書されたかは知るを得ないが『責任』の題材は、曾て廣井博士が我が工事畫報誌上に發表せられたる、小樽港の防波堤工事に際し、主任技師として人知れぬ決死の覺悟を以て、其難工事を完成された前後の事績であらうと思はれる。

『信念』の題材は、曾て上海に於て、同港の改良工事計畫の爲に國際專門技術會議を開催され、我國からは代表として廣井博士が出席され、英、米、佛、蘭、瑞、支の各國代表と研究討議を交はしたのであるが、廣井博士は他の5代表の意見に返して、獨自の研究になる改良工事計畫を主張して一歩も讓らなかつた。其際の信念的行動を採錄された事と思はれる此等の事績は、廣井勇博士傳に詳細に記錄されてゐるのであるが、文部省當局としても、充分なる資料の檢討により、愼重の態度を以て編纂せらるゝ事と思はれるから、第二の國民教育に從事すべき師範生徒に對して、必ずや好印象を與ふる事であらう。

寫眞2. 小樽築港防波堤の波浪





寫眞3. 晚年の廣井勇博士

然れども廣井博士の如きは單に此等の事績のみではない、他の日常に於ても世人の以て範とすべき行が甚だ多いのである。技術者としては勿論何人に對しても、無上の指導者であり、心の師友と仰ぎ得るのである。

特に新東亞建設の大業に精進しつゝある今日の我國に於て、精神的技術家の多數を必要とすべきは論を待たない處である。此際『責任』と『信念』との題材に於て、土木技術者の精神が一般國民に强調せらるゝ事は最も當を得た事である。

廣井博士の事績が、國定教科書に編入さるゝの議が文部省當局に於て決定するや、二、三の新聞紙には稀有の逸事として報導されたのであるが、之は實に我が土木界全般の名譽であり、光榮でもある。

尙ほ此の際に全國師範學校其他に教材用參考として廣井博士傳記を寄贈せんとするの議がある、名井九介博士其他の有志に於て着々其實行が進められてゐる由である。